

【動物飼育Q & A】（研究会の質問から） 回答：中川美穂子獣医師

Q モルモット飼育を考えています。実験動物が良いですか？どのように入手できますか？

A ネズミの仲間であるげっ歯類のモルモットは、ネズミと遭遇していると人に健康被害を及ぼす病気にかかったかもしれないと心配されています。入手するときは、実験動物業者からクリーンな動物を入れて、ネズミに遭遇させないように屋内で飼いましょう。実験動物業者は、獣医師にモルモットやゴールデンハムスターを納入してくれますが、その獣医師が最初に飼育指導をするとの条件があります。近くの動物病院あるいは当研究会の事務局にご相談ください。

Q ウサギののびているつめの切り方は？ウサギの去勢はどのようにしたらよいか？

A ウサギは無理をさせると暴れて背骨をおろす危険があります。ウサギに慣れた人が切る必要があります。獣医師の指導を受ける、あるいは獣医師にお願いすると良いでしょう。背骨を折ったウサギは死ぬことになります。また去勢は動物病院で麻酔をかけて施術します。近くの動物病院、あるいは地域の獣医師会事務所に相談してください。連絡が不順でしたら、当研究会事務所に連絡してください。

Q 10 年前頃、前任校のアヒルが病気になった時は東京都の学校飼育動物は無料で獣医が見てくれた。法の変更があったのか有料化になったが今後も同じか？

A 行政が予算をつけているところはまだ限られており、10 年前のそれは獣医師個人が優しさから負担していたと考えられます。しかし、学校とのやり取りの中で、なんらかの理由からやめたのでしょう。今、都内では20 ほどの自治体が獣医師会と連携して予算を手当てしているが、それ以外は難しいところにあります。地方によっては、学校が獣医師をつけて欲しいと要求し、行政が対応したところもありますので、ぜひ市内の小学校の要望として、行政に飼育支援体制をとるように伝えていただきたいと思います。

Q ハムスター、ウサギに児童がかまれた場合の対処法は？

A 化膿すると困りますね。それで庭でけがしたときと同じに、まず流水でよく洗って、土や汚れ、動物の唾液を落としましょう。そして、傷を見て出血の有無を確かめます。血がでていなければ傷は無い（黴菌は身体の中に入らない）のですから、心配ありません。血が出ていたら、養護教員に相談しましょう。なお、飼いウサギから人に感染する伝染病はありません。但し、地域によっては野生の野兔病があるので、野生ウサギとは遭遇させないこと。げっ歯類は最初に病気の無い動物を導入することが重要ですが、実は日本では、エイズや白血病などの免疫不全になった場合を除いて、動物の病気で死んだ方はいないといえます。病気感染を心配しないで、化膿を防ぎましょう。

Q 教室の十姉妹、鳥インフルエンザが心配。鳥インフルエンザになるとどんな症状になる？

A 日本の場合、感染したら鳥は全て、すぐに死亡しますので、1 羽でも元気なら感染の心配ありません。また教室ならなおさら感染の心配は無いでしょう。そして、なにより日本には、今この病気はありません。将来、再度養鶏場でまた発生したとしても、教室内で飼っていれば安心でしょう。また平成 16 年の騒動の時、あの何万羽もいた養鶏場で濃厚なウイルスが蔓延した京都の発生事例でも、鶏舎内で働いていた人に具合の悪い人や死者は出ていないのですから、そんなに心配しないでください。それより人インフルエンザの方が心配だから、学校は休校になるのです。あの鳥インフルエンザ騒動のあった当時、養鶏場の近くの小学校でも、休校になりませんでした。実は、ウイルスは同じ種類の中で感染が起こります。つまり、人に病気を移す一番の感染源の動物は、同種類の「人」でしかありません。（例外。狂犬病は全ての哺乳類が感染する）

動物飼育情報

【東京都源氏前小学校】「1年生、ふれあった動物で、「死の実感」

数年前、中川先生が講師をされた研修を受けた教員です。今私は品川の源氏前小学校の1年生を担当しています。

先週、ウコッケイが老衰で亡くなりました。一度子どもたちが授業で触れたこともあり、ちゃんとお別れをしてあげようと思い急きょ子どもたちとお別れの会をしました。それも先生のお話をきいてなければ過ぎていたことかもしれないと、お礼かたがたお知らせしました。

あまり動物に触れることのない子どもたちです。ましてや冷たく硬くなったなきがらにふれさ

せていいものかと躊躇しましたが、ふれさせてよかったと思いました。そのあとしっかり手を洗うようには言いました。

あまり言葉がでない子どもたちですが以下のような手紙を書きました。なにか感じてくれたらと思っています。ありがとうございました。

○チビ、つめたかった。かさかさだった。ね。

○チビがしんだ。このまえさわったときはふわふわだった。きょうはつめたかった。

○ふわふわがなくなっかわいそうです。しんじやっかわいそう

○このまえはふわふわだった。きょうはつめたかった。チビをさわったらかさかさだった。

○チビがしんだときはびっくりしました。かちかちだった。しかもつめたかった。さようなら。そしてありがとう。

○チビありがとう。しんだときはつめたかった。かわいそうだった。おとなしかった。ありがとう。チビ。さようなら。

○チビがしんじやったときいてびっくりしました。ほんとにかなしいです。ほんとにかわいそうです。

さようなら。ありがとう。チビ。

○チビがしんだってきいてびっくりしました。てんごくでまんぞくしてくださあいね。ありがとう。さようなら

○チビ、しぬのさいてい。チビもやすな。

○ちびちゃんがしんじやったことがかなしかったです。つめたかった。このまえたなべせんせいとべんきょうをしました。ちびをだっこしました。さようならちびちゃん。

○ふわふわだったのにかさかさでした。かなしかった。ちびがめをつぶってました。ちびはしよかった。ばいばい。チビ。（転載終わり）

（中川）

「チビ 死ぬのさいてい、チビもやすな」。この子は 何か抱えているのか、とても辛そうです。

抱きしめてあげたい。

なお、最初に元気な鳥を抱いた記憶がなかったら、このような実感をともなう感覚は生まれなかったでしょう。また、こどもたちは最初に抱いた後も、何度も飼育舎を覗いて、交流していたのでしょう。あたたかかった鳥が冷たく乾いていた！自分を見つめてくれた目も、つぶったまま。

飼育で「死なせないように」とばかり心配なさる先生もおられますが、適切な世話をしていたなら心配なさらずに。また間違いが起きたとしても、獣医師の支援を得て改善点を見つければ良いので、大事なものは、その死を無駄にしないで、つまり 活用して、子ども達が心を揺らし、生死や体などを理解するきっかけにして欲しいです。

衛生不安で、触らせられない場合は、貴小学校の担当獣医師に支援を求めて下さい。（本当は、大体の死因も子どもに説明してもらおうといいですよ、鶏類は結構癌が多いですよ。）その担当がわからなかったら 私に問い合わせてください。地域獣医師会とつながります。

社団法人 日本獣医師会 学校動物飼育支援対策検討委員会副委員長 中川 美穂子

＜情報を見たA獣医師から＞

丁度、当市で動物飼育モデル校として私が担当している学校のうさぎが不幸にも亡くなっ

てしまいました。その時に担当の先生には、飼育委員の子供達や、係わっていた子供達に対して、悲しい出来事だけど、この機会に命の話、遺体との対面、お別れ会などの提案はしたのですが、学校側はなんのアクションも起こしてくれませんでした。全校生徒にも伝えていません。こう言う事で、1年生の言葉を読ませて頂いて感銘致しました。学校への働きかけで、何か良い手立て等々ありましたらお教え頂きたいのですが、よろしくお願い致します（行政と協力して学校をケアしているA動物病院長）。

<A 獣医師へ>

学校が「動物の死」を大事に子どもに伝えるようになるには、先生が、動物体験による子どもたちの言葉などに、子どもの育ちを感じて、感動する体験が必要です。先の先生も、一年生の言葉の感じて、知らせてくれました。逆に言えば、獣医師の言葉は殆ど力が無いのです。ただ、学校をケアしている獣医師は、いろんな事例を知ることができるので、良い子どもの影響を感じたら、それを教師と喜んで大事にして、作文とか写真とか、外部に紹介できるものを先生からいただく、という方向で頑張ってみたらいかがでしょうか。

また「死因を探って、子どもに説明と慰めを」、との申し出に対し、学校の責任を指摘されるのを怖がります。しかし 多くの場合は動物の死因はがんであったりします。そのような情報を伝えて、「死すなわち生につながるので、ちょうど動物が死んでくれたから、この死も題材に子どもにきちんと説明したらよい勉強になると思いますよ、手伝います。」と、とやんわり言ったらわかってくれるかもしれません。

また、良い飼育体験の結果が現れている子ども達の作文を示すと良いでしょう。また、この「一年生の言葉」などの情報など、子どもの変化の事例を伝えて、ご自分の感動を伝えて、ともに子どもの成長を喜んでいと学校にわかってもらいましょう。

その意味で、東京都の動物飼育作文コンクールはとても子どもの変化が現れて、参考になる価値が高いと思います。ご覧ください。
<http://www.tvma.or.jp/contents/school/>

（東京都獣医師会学校飼育動物関連活動紹介）
<http://www.tvma.or.jp/contents/school/#hs21>（21年度作文コンクール報告）

<http://www.tvma.or.jp/contents/school/img/hp.txt.pdf>（21年度表彰作品集：すべて教科にいちづけた学年飼育の子たちの作文。飼育委員会の子たちは選ばれず。）

<B 動物病院長から>

今回の先生の試みの話には、死骸を抱かせることに対して、学校として、他からの賛否の対象にならないかという恐れがひしひしと伝わりました。（飼い主に死骸を見せ、お互いになでながら「最後」を語りあい、飼い主を慰める私たち獣医師とのギャップを感じます。

<B 獣医師へ>

この学校は、校長先生も、「良い試み」として、全国に学校名も教師名も紹介することを喜んで許してくださいました。

死体を見せたら子どもを傷つけるのではないかと、とか、死体から何か感染するのではないかと、多くの教員、学校は恐れますが、実体験がいかに子どもの成長に必要かということを、今回の一年生の言葉は示しています。また衛生面ですが、蚤などの寄生虫がいるときは、体温が下がると他に移るため処置が必要ですが、それが無いなら素手で撫でて欲しいです。また事後の手洗いですが、土いじりをした後と同じ程度に必要だにご理解ください。動物が殊更に危険だというのは誤解に過ぎません。

